留学生を通して知る世界のことばと文化

代表　谷部弘子（留学生センター）

○ 開発教材の形式：　ＤＶＤ・学習シート・Web サイト
○ 対 象 学 校 種：　小学校
○ 実施可能教科等：　総合的な学習の時間・道徳の時間等
○ 関連する道徳の内容項目：
　　信頼・友情、寛容・謙虚、国際理解・親善　等

教材内容の紹介

教材は三つの形式をとっています。一つは「留学生を通して知る世界のことばと文化」という A4 判シートで、11 カ国 14 名の留学生による自国紹介とワークシートによって構成されています。二つ目は、「みなさん、こんにちは」というＤＶＤ教材です。ここには、5 カ国 6 名の留学生による自国紹介（一人あたり約 5 分）が入っています。東京学芸大学で学ぶ留学生が、子どもたちに語りかける形式で撮影されています。シートとＤＶＤいずれにも、留学生の簡単な自己紹介と自国語による挨拶表現が共通して含まれており、ＤＶＤでは、挨拶の後、留学生ごとにさまざまな観点から自国の紹介がなされています。三つ目は、各国の簡単な挨拶を紹介した Web サイトです。地図上のピンをクリックすると、「こんにちは」「さようなら」に類する簡単な挨拶がその地に住む留学生自身の声で聞け、その使い方を学ぶことができます。「○○人」、「○○語」と一括りにするのではなく、その多様性に触れることができるよう、留学生が普段の生活で話す地域方言も積極的に取り入れました。Web 上の世界地図に各々の顔写真や解説を重ねて表示することにより、各留学生が生活する場所の地理的特徴や距離感などを視覚化する工夫もなされています。国際理解に関する汎用性の高い教材です。

開発のポイント

本教材は、道徳教材としては主として以下の内容項目に関わる。

◆主として集団や社会とのかかわり：「国際理解」

◆主として他の人とのかかわり：「信頼・友情」「寛容・謙虚」

現代は、インターネットなど、さまざまなメディアを介して諸外国に関する知識を獲得することが格段に容易になった時代であり、小学生でもさまざまな形で「外国の人々や文化」との接点をもちうると考えられる。しかし、国際理解を抽象的な理解に終わらせず、持続的な興味・関心につなげるためには、具体的な「人」とのかかわりが重要になってくるのではないだろうか。

林原（2011）は、小学校 5、6 年生 443 名を対象に行った質問紙調査の結果、小学校高学年の国際理解への興味・関心は、「外国語」だけでなく「地球課題」「国際交流」「異文化体験」とも関連していることを明らかにし、さらに「児童の異文化体験のうち、外国人の友人数はすべての因子に影響を与えること」を示している。つまり、自らの意思によって外国人と積極的に関わり親交を深めることのできる活動が、児童の「国際理解」への興味・関心を高めると考えられるということである。

本教材は、上記のような活動の有効性をふまえた上で、外国人を身近に感じ、外国人と積極的にかかわろうとする態度につながる動機付けとなるよう意図した。

国際理解のための教材開発
― 留学生を通して知る世界のことばと文化 ―

谷部　弘子（留学生センター）
島田めぐみ（留学生センター）
赤司英一郎（ヨーロッパ言語・文化研究）
川﨑　誠司（社会科教育）

１．本企画にいたる背景と経緯

留学生センターでは、本学外国人留学生を対象とする日本語教育および日本理解教育の一環として、附属小金井小学校、附属竹早小学校、附属大泉小学校との交流活動を行っている[1]。いずれも、各附属小学校から依頼されて始まった交流であるが、小学生、外国人留学生双方にとって有意義な活動となるよう、留学生センターとしても積極的に取り組んでいる。とくに、附属小金井小学校および附属大泉小学校との交流活動は、単発の交流ではなく同一の参加者が複数回顔を合わせることで、試行錯誤をしながら関わりを深めることが可能となっている。

本教材は、このような小学校中・高学年児童と外国人留学生の相互理解のための交流活動をより深めるため、児童の動機付けや事前活動の際に活用することを想定し、開発を企画したものである。

２．道徳教育における位置づけ

本教材は、道徳教育教材としては、主として以下の内容項目に関わる。

▸主として集団や社会とのかかわり：「国際理解」

▸主として他の人とのかかわり：「信頼・友情」「寛容・謙虚」

現代は、インターネットやさまざまなメディアを介して諸外国に関する知識を獲得することが格段に容易となった時代であり、小学生でもさまざまな形で「外国の人々や文化」との接点を持ち得ると考えられる。が、「国際理解」を抽象的な理解に終わらせず、持続的な興味・関心につなげるためには、具体的な「人」との関わりが重要になってくるのではないだろうか。

林原（2011）は、小学校 5、6 年生 443 名を対象に行った質問紙調査の結果、小学校高学年の国際理解への興味・関心は、「外国語」だけでなく「地球的課題」「国際交流」「異文化体験」とも関連していることを明らかにし、さらに「児童の異文化接触の経験のうち、外国人の友人数はすべての因子に影響を与えること」を示している。つまり、自らの意思によって外国人と積極的に関わり親交を深めることのできる活動が児童の「国際理解」への興味・関心を高めると考えられるということである。

本教材は、上記のような活動の有効性をふまえた上で、外国人を身近に感じ、積極的に関わろうとする態度につながる動機付けとなるよう意図した。

３．教材（試作版）の概要

本教材（試作版）は、以下の二つの媒体で構成されている。

A. 留学生による自国紹介とワークシート（11 カ国 14 名・紙媒体）：「留学生を通して知る世界のことばと文化」（2010）

B. 留学生による自国紹介（5 カ国 6 名・DVD 媒体）：「みなさん、こんにちは！」（仮題、2011）

A・B とも、本学で学ぶ外国人留学生が、直接子どもたちに語りかける形式をとった。A（各自 A4 判 1 枚）で共通して取り上げた項目は、簡単な自己紹介と自国語によるあいさつ表現である。その他

---

[1] 東京学芸大学留学生センター（2011）『2010 事業報告 外国人留学生と附属小学校との交流授業』参照

の紹介事項は、各々にまかせた。事項の選択にあたっては、調べればすぐわかるような一般的な項目ではなく、個々人の生活体験や日本語・日本文化学習経験に即して出身国・地域の言語や文化・社会を紹介するよう指導したが、試作版では自国の料理をとりあげたものが多く、話題に広がりをもたせることができなかった。B は、A をもとにしたプレゼンテーションを撮影録画したものである。一人の収録時間は約 5 分間である。

４．教材の試用結果と改善の方向性

初年度に作成した紙媒体の試用版改善に向けて、附属小金井小学校および附属大泉小学校の関係教員に依頼し、試用していただいた。本稿では、附属大泉小学校での試用の概要を以下にご紹介する。

［活動名称と目的］「4・5年生のチームでLET'S TRY！（＜文化・遊び＞ゼミ活動）」

⑴ 4年生と5年生が一つのチームとなって、互いに協力しながら自分たちの活動をつくり進めていく

⑵ 学校以外の人とかかわり，その人から学びながら，活動をつくっていく

［交流対象］本学留学生のほかユニセフ職員、アニメスタジオの社員、保育園園児、タイ料理店主等

［留学生との交流における本教材の試用］全 8 回のうち第 1 回目で DVD を視聴、第 2 回目の「調べ学習」の際にワークシートを活用。

交流活動終了後、担当教員より「B は、今回の直接の交流相手ではないが、「留学生」のイメージ作りに役立った。一人約 5 分という長さも適当」「A のワークシートは、交流相手である留学生の出身国について調べる際の糸口として使えた。各留学生の自己紹介文も、一部ルビが必要な語彙もあるが、全体的には読みこなせる文章になっている」といった評価をいただいた。

話題については、＜食べ物は子どもたちから留学生に伝えたいこととしてもよくあげられる。料理そのものより食べ方や食習慣といった観点からとりあげたほうが興味関心を広げることになるのではないか＞＜子どもたちにとって身近な学校生活の話題もよいのではないか＞といったご意見をいただいた。民族服が学校の制服になっているという話題や今回の交流でその国の「遊び」を体験したことは印象深かったようだ。双方で伝えたいものと伝えてほしいものにズレが生じているとすれば、その要因を探ることもまた「理解」への道筋なのであろうが、改善に向けて伝達内容を再検討してみたい。

５．今後の活用への展望

現在、本教材（試作版）をウェブ上で閲覧・利用できるよう、サイトを構築中である。A・B を世界地図上に貼付けることにより、各留学生が生活する地域の地理的特徴や距離感などを視覚化することができ、音声や動画の差し替えや追加も比較的簡単に行うことができるようになる。また、現段階では主に小学校高学年を対象として考えてきたが、児童の発達段階にあわせた文章や話題の選択ができるようになれば、使用可能な範囲も広がるのではないかと考えている。

［引用文献］

林原 慎（2011）「小学校高学年の国際理解に関する興味・関心に影響を及ぼす要因―児童の異文化接触の経験からの検討」『異文化間教育』33，98-114

［謝辞］教材の試用については、附属小金井小学校・松岡仁教諭、附属大泉小学校・中村昌子教諭にご協力とご教示をいただきました。ここにあらためてお礼申し上げます。